

池内了編集「寺田寅彦」を読む ―その1―

2011年11月28日読者として友の会掲示板に紹介文を書き、「新しい平成の普及版」という一言を入れました。その責任を感じ、読後感をいささか連載したいのです。この連載では池内了編集「寺田寅彦」を「この本」と呼称します。

その1はこの本の「鎖骨」です。

文中の喩えの例と論理構成の上手さ（うまさ）には舌を巻くばかりですね。余人にまねの出来るものではありません。是非ともご一読を。

この本を読んで、私の「連想」は「鎖骨」から「テッポウエビの指」へ、そして「情報爆発」へとジャンプしてしまいました。

「テッポウエビの指再生」については、この本の著者の一人渡辺政隆著「一粒の柿の種」に書かれています。自然の長い進化の巧妙さでしょう。「自己組織化と進化の論理」スチュアート・カウフマン。

次は、現在情報技術（IT）社会に突入しつつある「情報爆発」：迷路への突入です。大変な難問です。ここ3年間で層の情報を含めてすべての情報量が2倍になるような状態らしいのです。

情報が情報として流通するための条件は、文字が正しく蓄積されて在り、正しく伝送されることで、符号の「誤り訂正」が必須です。このために「冗長性」という概念が基礎になります。情報技術（マルチメディア）のソフト面です。

「テッポウエビの指再生」は、自然界の見事な修復でハード面と言えるでしょう。

「遺伝子操作」はハード面です。自然の人工化にタッチし始めたわけです。その一例「青いバラ」の成功は「文化の香り」でしょう。バラに興味のある方は、この本で池内先生の特別対談者の大役を果たされた最相葉月さんの同名の本を読んでください。

「情報爆発」が現在IT社会のアキレス腱で、ソフト面での「迷路への突入」の危険性を孕んでいるとすると、「遺伝子工学・技術」の普及は、如何なる危険性と伴走する可能性を持っているのでしょうか。

寅彦の「鎖骨」は、人間の肉体と精神の病（やまい）を身近な喩えで、短い文章で判りやすく、しかも十分に扱っており、情報技術のソフト面、遺伝子工学のハード面に対する警告を示唆しているように感じました。

(追加)

この本の学術連環図の「ある日の経験」(大正10年(1921)12月)全集第八巻には、「吾々は学問というものの方法に慣れすぎて、あまりにも何でも切り離し過ぎるために、あらゆる体験の中に含まれた一番大事なものをいつでも見失っている。

肉には肉、骨は骨に切り離されて、骨と肉の間に潜む滋味はもう味わわれなくなる。これはあまりに勿体ない事である。」と書かれている。

「ある日の経験」は帝国美術院での展覧会の気持ちを述べたもので、「おしまいの方の部屋の隅に、女の子の小さな像が一枚かかっていた。」「この絵には、これと云って手っ取り早く感心しなければならないような、一口ですぐ云ってしまわれるような趣向やタッチが少なくとも私には目に立たない。それだけ安易な心持で自然に額縁の中の世界へ這入って行けるように思う。じっと見ていると何かしら嬉しいような、有難いような気がして来る。ほんとうに描いた人の心持が、見ている自分の心に滲み込んで来るように思う。」「なにかしら人の子ではなくて、何かの菩薩のような気がする。」「宅へ帰って昼飯を食いながら・・・また展覧会の童女の像を思い出した。」とある。

「鎖骨」は昭和8年(1933)1月に書かれており「ルクレチウスと科学」は昭和6年(1931)に書かれ、唯物史観を宣言したものと言えましょう。

寅彦はノーベル化学賞のアーレニウス著(注)「史的に見たる科学的宇宙観の変遷」を出版(1936)、それも改訂版を含めて2冊という力の入れようです。

(注) 寅彦は翻訳に先立ち1910年ストックホルムにアーレニウスを訪問、その時の様子は改訂版に書かれている。

全集にも収録されていて、翻訳の意図もよく理解できる。

池内了編集「寺田寅彦」を読む ―その2―

続く―その2―はこの本の特集：「その学びと仕事より」です。

山本貴光さんの「寺田寅彦学術連環図」88ページ。まず有難いの一言です。

2. 科学の項に、全集登場頻度 第3位「ルクレチウス 70回」とあります。ルクレチウスといえば「ルクレチウスと科学」（注1）です。多くの文学随筆の愛読者には、いささか難物かもしれません。でも子供用にも立派な本が出ています。（注2）

ここで私事を書くことをお許してください。昭和30年代に地方大学の哲学専攻の学生でした。時代の流れでマルクスの資本論を読みました。ただマルクスが書いた本（デモクリトス、エピクロス）は知りませんでした。（注3）

世間一般のエピキュリアン（快樂主義者）と言う言葉に反撥を覚え、幾つかの本（注4）による自己流解釈で満足していました。残念ながら私の誕生前に出ていた「ルクレチウスと科学」の存在には気がつきませんでした。遅まきながら挑戦してみます。

何しろ山本貴光さんの連環図作成が勇気をあたえてくれました。連環図は寅彦研究のためには必須の資料として役立ち始めることでしょう。やはり情報技術の進歩、発展の賜物ですね。

1927年（昭和2年）のお話が「緒言」に詳しく書かれています。“くどい”ようですが少し引用します。

「丸善で目に付いた」、「そうして旧知の人にめぐり合ったような気がして早速一本を求め、帰りの電車の中で拾い読みした」、「予想以上に面白い事柄が満載されてあるように感ぜられた」。

1928年には雑誌「ネイチャー：nature」の紹介を見てマンローの「詳細なる評注に加うるに、物理学者のダ・アンドラデのルクレチウスの科学的意義に関する解説を取り寄せ読む」、「しかして読めば読むほど面白い本であるという考えを深くした」、「ルクレチウスを読み破ることが出来たら、今までのルクレチウス研究者が発見しえなかった意外なものを読み破ることが出来はしないかと疑う」、「それほどに、ルクレチウスの中には多くの未来が黙示されているのである」（この本の特集でも鎌田浩毅さんも引用されている）。

寅彦のほれ込みようはただならぬものです。そして早くも1928年「ルクレチウスと科学」が書かれています。なんとすごい。「旧知の人に、めぐり合ったような気がした」という寅彦の言葉通りで一目ぼれとはこのことでしょう。

でも、これだけの解説としての「緒言」と「ルクレチウス詩全六巻」の評注は言語学者とも云える寅彦でなくて、また物理学者でなくては書けるものではないでしょう。

私の知識ではまともな対応は無理です。まず（注2）のブラッグ著を読みました。

次回、－その3－では寅彦が80年程前にマンローのルクレチウス詩評注を参照したものであり、日本古典文学大系21の岩田義一、藤沢令夫訳とは原典が異なります。科学者寺田寅彦の選んだマンローのルクレチウス詩がいかなるものか、それを原典からの訳語で紹介するのも、私の楽しい勉強になるのが第1ですが、またいささか皆様のお役に立つのではないかと思っています。

（注1）寅彦全集第五巻

（注2）「宇宙をつくるものアトム」（ルクレチウス著）、「宇宙を作るものアトム」（ブラッグ著）少年少女科学名著全集4／国土社 *同じ名前で一冊です。

「原子の歌－宇宙をつくるものアトム」（ルクレチウス著国分一太郎訳）／国土社

（注3）「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異（と補遺）」カール・マルクス学位論文。

（注4）沢山あるので、「後期ギリシャ哲学者資料集」／岩波 V章 エピクロス（342/1-271/70 B.C）生涯より転記します。

101 [通俗的教養に対して] 自分自身も世間一般の教養の洗礼を受けなかったが、自分と同じようにそれをやり過ぎて哲学の道に入った人々をも祝福して、次のような言葉を発している「これ、お前は幸福な人間だ、どんな咎にも染まることなく哲学の道に進んだのだから」

103 [庭園における共同生活] きわめて儉約で質素な生活を送った。友達仲間の所有物は共有であると言ったピュタゴラスのやり方のように、財産を共有にしておくことは適当でない。なぜなら、そのようなことは互いに信じあえない人々のすることであり、信頼のおけない人のやることは、また友人のやることでもないからだ、とエピクロスは考えていた。手紙の言葉を少し。「自分は、水と一切れの何もつけないパンさえあれば満足だ」「チーズを小瓶に一つ送ってほしい。その気になったらご馳走に与れるように」と手紙に書いている。＜老後かもしれないね＞

2012-01-07

Junior MS

(2012-01-16 一部修正)

池内了編集「寺田寅彦」を読む ―その3―

＝寅彦が書いている。ルクレチウスを読めと＝

―その1―、―その2―は計算機屋の立場で書きました。今回からは広義のギリシャ哲学として寅彦の「ルクレチウスと科学」について書きます。なお多くの大科学者がルクレチウス詩を読んでいます（注1）

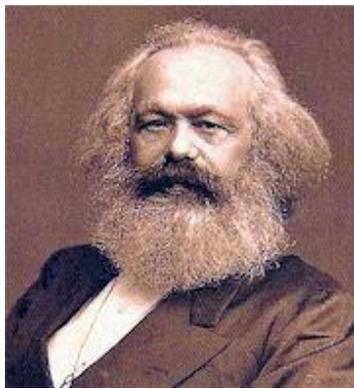
なお寅彦の「緒言」はページ数の増加を考え全て省略いたします。

今回はカール・マルクスの唯一のしかも偶然に保存されたという学生時代の手紙（1836-1837年と推定されている）の内容の紹介から入りたい。

マルクスは17歳で婚約し、18歳になるかならない若さで婚約が認められましたが、つらい貧乏と、もっと悪いことには、残忍な中傷、忌まわしい誹謗、冷淡な無関心の7年間を過ごし、しかも二人は不幸と幸福の中で生涯をかけて愛し合い（1843年6月19日結婚）ぐらつくことも、迷うこともなく死にいたるまで節を貫いています。マルクスの人間的側面です。

学位論文は「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異」であり、その次に「ルクレチウス」の「事物の本性について」がエピクロスの哲学第4ノートとして書かれております。（注2）

なおギリシャ専門の「初期のマルクス」淡野安太郎著が在るようです。



カール・マルクス

学位論文について興味のある方は私的要約ですが（注3）を読んでください。

さて寅彦が読んだマンローの評注（1928年）のルクレチウス詩はマルクスがローマ語より訳した「事物の本性について」と100年近い差があります。マルクスとマンローの評注（寅彦の論文引用と一応同じと仮定して論理を進めたい）

との照合比較は―その 4―から始めます。マンローはマルクスの論文を読んでいたか、興味のあるところです。マンローの原論文を私は知りません、専門の先生方にお任せしたい。

(注 1) 寅彦指摘のケルビン卿はマンローの訳の助けを借りて (1895 年) 又、ニュートンも知らなかったとは想像できないと書いていますが調べていません。

(注 2) ①マルクス・エンゲルス全集第 40 巻 (大月書店)

②エピクロスの園のマルクス (叢書:ユニベルシタス 939) フランシーヌ・マルコヴィッツ著小井戸光彦訳 (法政大学出版局)

(注 3) デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異を一言で言えば、デモクリトスは必然性の適用です。これに対しエピクロスには現実可能性と抽象的可能性の二つに区分し、前者は悟性のごとく限界を持っているが、後者に対しては偶然を適用している。少し詳しく説明すると、現実的可能性なるものは、その客体が問題なのではなく、説明する主体が問題であり、抽象的可能性で考えられ得るものは、思考する主体にとって、なんらの限界もなく、現実的可能性が現実的であるかどうかは、どうでもよいことであり、この場合の関心は、対象に対しては関与しない無関心ということです。

エピクロスには全て可能なものは可能なものとして許容し「存在の偶然を思考の偶然へ移し変えています」。マルクス・エンゲルス全集第 40 巻「事物の本性について」第一の冒頭に唯一行「ルクレティウスはごくわずかし役立たない」と書いた文章の含意について考えました。

この方法は「ドイツ・イデオロギー」から「資本論」に通ずる道だと思います。

現在の科学レベルで言えば、「寅彦さんのプロバビリティ 3 話―その 3―酔っ払いの行方: ブラウン運動」からミドルワールドへの大きな展開につながると期待しています。

―その 4―の予定であるルクレティウス詩は第 1~6 巻の大きな構成ですが、寅彦の「緒言」には巻も番号もなく、続く第一巻からは巻の表示のみで番号はありません。表の巻番号はできる範囲でローマ数字とし、詩の番号はアラビア数字で示した表を予定しています。

2012-02-15

Junior MS

* お断り: 著者療養中につき―その 4―が遅れそうです。すみません。